

## 年頭のご挨拶

外部の眼を積極的に採り入れ、  
 教学改革にも意欲的に取り組み、  
 学園の発展をめざしてまいります

## 新

しい年を迎えました。ますます社会が不確実性を増す中、学校教育をめぐる環境も、少子化の波を受けて、一層厳しくなっていくことでしょう。わが跡見学園も次代を見据え、さらなる教育環境の整備・充実を図っていかねばなりません。

学校教育法改正をはじめとする大学を取り巻く制度の変化に対応し、本学園では昨年度から、第三者の立場で学園の組織・運営や本学の進める教学改革に対して、客観的かつシビアに評価していただくことを狙いに、理事・評議員に外部の学識経験者を招聘し始めました。また、昨年4月からは、政策研究大学院大学で学長特別補佐を務められている今野雅裕先生に教学監事をお願いしています。

こうして、外部の眼を採り入

れて公正な自己点検・評価を推し進め、その結果を広く社会に公開することで、大学としての説明責任を果たしていきたいと考えています。同時に、予算編成についても、学園の規模にふさわしい身の丈に合った予算を組み、安定した学園経営につなげていきます。

文理融合型の  
 新しい教養教育の姿を  
 確立したい

大学の人文科学系の学問が「社会で役に立たない」と逆風にさらされています。しかし、哲学や歴史学、文学など人文科学系の学問は、人間そのものの在り方や、人間としてどう生きるべきかを探究する非常に意義のある学問です。長らく文学部の単

科大学だった本大学にとっても、文学部は大学の根幹をなす重要な学部です。

しかし、現状のままでは文学部はその存在意義が問われることになる危険があります。受験生に高いモチベーションで文学部をめざしてもらい、文学部で学ぶことにやりがいや誇りを持つてもらうにはどうすべきか…。

私は、まず教養教育の改革に取り組みべきと考えます。社会構造が複雑化し、グローバル化の進む現代では、もはや文系・理系という区別自体が時代にそぐわなくなっています。文系であっても、生命科学や都市論などを学ぶ「文理融合型」の教養教育が必要です。文系・理系の枠を超えた幅広い教養こそが、グローバル社会を生き抜くための土台になるはずです。



跡見学園理事長  
 山崎 一穎

幸い、文学部の4学科中にはさまざまな学問分野が含まれており、教員スタッフも充実しています。こうした学問的資源を活かし、新しい文理融合型の教養教育プログラムを確立する。それがひいては次代の文学部の有り様を指し示してくれるのではないかと期待しています。

昨年度に開設した大学の観光コミュニケーション学部、中高でスタートした新教育プロジェクトは、ともに順調な滑り出しを見せています。改革の成果が表れるのはまだ先のことですが、今後とも変化の激しい社会環境の中で生き抜いていくために、應ずることなく改革を推し進めていきたいと考えています。

皆様の一層のご支援とご協力を賜りたく、今年もよろしくお願ひ申し上げます。